2026 年 8 月 24 日

NHK 千葉放送局同行取材・千葉豪雨現地調査まとめ

東北大学 災害科学国際研究所 特任教授　原口 強

2026 年 8 月 24 日

1. 目的と位置付け

2026 年 8 月 24 日、8 月 13 日に千葉県で発生した記録的豪雨による浸水被害について、NHK 千葉放送局の取材班とともに被災地点を確認し、現地の浸水痕跡、周辺地形、道路・鉄道・排水施設等の都市構造、ならびに施設関係者等への聞き取りをもとに、浸水発生の背景と今後の対策を検討した。都市型水害を『雨の量』『地形』『人工地形』『排水能力』『建物への流入経路』の組合せとして理解することを目的とした。

2. 8 月 13 日豪雨の客観的特徴

気象庁の速報値によれば、8 月 13 日の千葉市中央区（千葉観測所）の日降水量は 351.0 mm に達し、1 時間降水量は 18 時 48 分までに 115.0 mm、3 時間降水量は 19 時 30 分までに 188.5 mm を記録した。1 時間値・3 時間値はいずれも同観測所の観測史上 1 位を更新している。また、8 月 13 日 24 時までの 72 時間降水量は 406.5 mm で、これも観測史上 1 位となった。茂原では 8 月 13 日の日降水量 240.0 mm、3 時間降水量 142.0 mm を記録している。したがって今回の災害は、単に総雨量が多かっただけでなく、短時間に極めて大量の雨水が都市域へ供給されたことが第一の特徴である。

観測地点	指標	観測値	位置付け
千葉市中央区	日降水量（8/13）	351.0 mm	8 月平年値 115.7 mm の約 3 倍
千葉市中央区	最大 1 時間降水量	115.0 mm	観測史上 1 位を更新
千葉市中央区	最大 3 時間降水量	188.5 mm	観測史上 1 位を更新
千葉市中央区	72 時間降水量	406.5 mm	観測史上 1 位を更新
茂原市	日降水量（8/13）	240.0 mm	8 月として観測史上 1 位
茂原市	最大 3 時間降水量	142.0 mm	8 月の従来 1 位以上

注：上記は気象庁が公表した速報値に基づく。速報値は後日修正される場合がある。

3. これまでの現地調査と 8 月 24 日の位置付け

8 月 18 日の第一次現地調査では、蘇我駅周辺、千葉大学医学部附属病院、大野台の店舗等を含む複数地点を確認した。千葉大学医学部附属病院では、施設側から地下部への浸水と電気設備周辺への水の流入について説明を受けた。また、大野台では台地上の比較的標高の高い場所でも局所的な浸水が生じており、『標高が高ければ安全』『低地だけが浸水する』という単純な理解では説明できない事例を確認した。8 月 24 日の第二次調査では、NHK 千葉放送局の同行取材のもと、特に都市内で水がどこから集まり、道路や鉄道等の人工地形との関係でどこに滞留したのかという『水の道』に重点を置いて現地確認と聞き取りを行った。

4. 8 月 24 日に現地で確認した事項

調査地点では、建物や周辺に残る浸水痕跡を確認し、関係者から当日の状況を聞き取った。一部地点では、痕跡や聞き取りから最大約 1.5 m 規模の浸水に達したとみられる場所があった。ただし、8 月 24 日時点ではすでに水が引いており、豪雨時の流向・流速・水位変化を直接観測したものではない。したがって、浸水痕跡、証言、微地形、道路・鉄道・排水路の配置等を相互に照合しながら検討する必要がある。

現場ヒアリングでは、①最初に水が現れた方向、②水位上昇の速さ、③最大浸水深、④建物への流入箇所、⑤過去の浸水経験、⑥豪雨後に水が引いた方向・時間などが重要な確認事項となる。こうした情報は、数値標高モデルやハザードマップだけでは得られない、災害直後に記録すべき一次情報である。

5. 浸水を『低地』だけで説明しない

今回の一連の調査から重要と考えるのは、浸水を単純に『土地が低いから』と説明しないことである。豪雨時の水は自然地形に従う一方、都市化によって形成された道路、鉄道盛土、宅地造成地、建物、側溝、排水路等によって流路を変える。道路は条件によっては線状の集水路となり、鉄道・道路盛土等は横断方向の流れを妨げる局所的な障壁となり得る。その結果、周囲から流入した水が特定の場所に集中し、排水能力を上回ると急速な冠水・浸水へ移行する可能性がある。

したがって都市型水害は、概念的には『極端な降雨入力』に対し、『自然地形・人工地形が規定する集水と流下』と『下水・側溝・河川等の排水能力』のバランスが崩れた現象として捉えるべきである。今回の千葉豪雨では、短時間降雨が極端であったため、通常時には問題にならない微小な地形差や人工構造物の影響が顕在化した可能性が高い。

6. 地形発達史と都市化を重ねて読む必要性

現在の市街地は、長期的な地形発達によって形成された低地、台地、谷地形、旧河道、旧海岸域等の上に、近現代の造成、道路、鉄道、宅地、工業団地、排水施設等が重ねられて成立している。このため、現在の地図だけでなく旧版地形図、土地条件図、数値標高モデル、造成前後の地形資料等を重ね、『本来の水の通り道』と『都市化後の水の通り道』の変化を読むことが重要である。これは茂原・大網白里等の低地だけでなく、大野台のような台地上の局所浸水を理解する際にも必要な視点である。

7. 8 月 24 日の現場で考えられた浸水機構

8 月 24 日に確認した地点の一部では、周囲の微地形と鉄道・道路・排水路等の位置関係から、周辺から集まった表流水が人工構造物によって流れを規制され、局所的に滞留・集中した可能性を検討した。とりわけ鉄道盛土等は、地形条件によっては豪雨時の表流水に対する横断方向の障壁となる可能性がある。一方で、現段階では『特定の鉄道盛土や構造物が浸水を引き起こした』と因果関係を断定することはできない。排水施設の断面・流下能力、下流側水位、当日の時刻別降雨、浸水映像、詳細標高データ等による追加検証が必要である。

8. 対策は単一設備ではなく多重防御で考える

今回の調査から、都市型水害への対策は一つの設備だけに依存すべきではない。地域・流域レベルでは雨水を貯留・浸透・安全に流下させる対策、地区レベルでは道路・排水施設・土地利用を踏まえた対策、敷地レベルでは建物周辺への流入制御、建物レベルでは出入口、地下入口、換気口、配管・排水系統等の弱点対策を組み合わせる必要がある。

建物開口部に設置する止水設備は、その選択肢の一つである。しかし入口を塞げば建物全体の浸水を防げるとは限らない。想定水深を超えた場合、別の開口部や排水設備、壁面等から浸入する場合があり、建物全体の流入経路を把握した上で位置付ける必要がある。したがって本調査は特定の止水板製品の性能評価・推奨を行うものではなく、止水設備一般を多重防御の一要素として検討したものである。

9. 今後の検証課題

- 気象庁等の時刻別降雨データと、SNS・報道映像・現地証言による浸水時刻歴の照合。
- 高解像度 DEM 等を用いた微地形解析と、道路・鉄道・造成地を含む人工地形の把握。
- 下水道、側溝、排水路、河川等の排水系統と設計・実流下能力の確認。
- 旧版地形図等を用いた造成前地形・旧河道・旧海岸域等と現在の浸水地点の比較。
- 建物ごとの流入口、浸水深、浸水継続時間を整理し、対策の有効範囲と限界を検証すること。

10. まとめ

2026 年 8 月 13 日の千葉豪雨では、千葉市中央区で 1 時間 115.0 mm、3 時間 188.5 mm、日降水量 351.0 mm という極端な降雨が観測された。この強い降雨入力が都市の排水能力を短時間に上回ったことが、広範な冠水・浸水の基本的背景である。しかし、被害の場所と程度を決めたのは雨量だけではない。自然地形、過去からの地形発達、都市化、道路・鉄道等の人工地形、排水施設、建物配置が複合的に作用し、都市内に局所的な『水の道』と『水が滞留する場所』を形成したと考える必要がある。

8 月 24 日の NHK 千葉放送局との同行調査では、被災現場を歩き、痕跡と証言を確認しながら、『なぜここに水が集まったのか』『次の豪雨でも同様のことが起こり得るのか』『どこを改善すべきか』という視点で検討した。重要なのは、災害後の原因説明だけにとどまらず、地形と都市構造から水の経路を事前に読み解き、地域・地区・敷地・建物という複数の階層で被害軽減策を準備することである。

水害は「雨の量」だけで決まるのではない。雨がどこに降り、その水がどこを通り、どこに集まり、どこから排出できるかを読むことが、これからの都市型水害対策の基本である。

参考資料

- 気象庁「特定期間の全国観測値ランキング（2026 年 8 月 13 日）」：千葉市中央区の日降水量 351.0 mm、3 時間降水量 188.5 mm 等。
- 気象庁「特定期間の全国観測値ランキング（2026 年 8 月 13 日を含む期間）」：千葉市中央区の最大 1 時間降水量 115.0 mm 等。
- 気象庁「過去の気象データ検索（茂原）」：2026 年 8 月 13 日の日降水量 240.0 mm。
- 2026 年 8 月 18 日および 8 月 24 日に実施した現地調査・関係者ヒアリング記録。